

弁当を盗む

六年生になると、戦争や平和について考えることが年間を通した大きなテーマとなります。その取り組みの中で、地域の人から戦争体験を聞くことがあります。戦争は長崎や広島などの遠い所の話ではなく、自分たちの住む地域でも確実に起きており、今とは全く違う生活を強いられていたことを知らされます。しかし、今はどの方もご高齢で、広島でも直接の被爆体験を聞くことがほとんどできなくなっています。だからこそ、しっかりと過去の事実を学び、語り継いで行くための充実した学習を用意しなければならぬと考えます。

さて、次の文章は、王寺の学校に勤めていたころ、地域の方に戦争体験を語ったもらった時の私の雑記です。

「弁当を盗む」

二月の中旬、子ども達が地域の方から戦時中の生活の様子について話を聞くという機会があった。ヒロシマでもなく大都会の大阪でもない。疎開先にあたる奈良の片田舎にも戦争の傷跡は生々しい。艦載機の銃撃があったり、空襲があったりと話からはたくさん新しい発見があった。中でも、学校の事についての話は興味深かった。

その方は、終戦当時小学校四年生。終戦間近の一九四五年はモノが極度に不足していたようだ。子どもたちは学校に着くと、まず、はきかえた靴を盗まれぬよう自分の机の下に運んだようである。また、教室を空けるときは、日直二人を教室に残させて、弁当が盗まれないように見張りを立てさせていたという。

貧しき故に弁当を盗むという何ともつらい時代だったことか。弁当がなくなることが頻繁に起こり、どうすることも出来ない貧しきという壁に担任も悩んだことだろう。「犯人をつくらせない」ために日直に見張りをさせる。教師の苦悩や優しさが推し量れるのであった。

二〇〇五年三月六日

これは戦時中の王寺小学校の様子です。王寺町では、ニチアス工場を標的に爆弾が落とされたり、艦載機の銃撃で女性駅員が亡くなられたりしています。同じような事が、下田でも起きており、四年前に聞いた地域の方の話からは、艦載機の銃撃で小学四年生が亡くなったと言っていることを知りました。三学期になると思いますが、子どもの心に響く学習を進めて行きたいです。

※これまでの教師生活の中で、琴線に触れたことを雑記として紹介していきたいと思えます。

(続き)

記述が変わった教科書

②鎖国と絵踏み

○鎖国

「鎖国」といえば、江戸幕府が行った代表的な政策で、キリスト教の禁止、日本人の出入国禁止が挙げられ、家光の時に完成されたと言いました。しかし、当時は「四つの窓口」から貿易も行われていて、鎖国はなかったと主張されるようになりました。この「四つの窓口」とは、オランダ・中国との交易をしていた「長崎」、朝鮮と通じていた「対馬」、琉球・中国と通じていた「薩摩藩」、アイヌと「松前藩」など、門戸を閉ざして鎖国をしていたと断定するような書き方はしていません。教科書には、鎖国という文言を用いながらも、次のように記述されています。

「鎖国のなかでの交流：鎖国の間も、ほかの国や地域との交流がとだえたわけではありませんでした。オランダや中国との貿易は長崎で行われ、朝鮮との貿易は対馬藩を通じて行われていました。また、薩摩藩に征服された後も琉球沖縄(具)は中国との貿易を続け、蝦夷地(北海道)では松前藩がアイヌの人々との交易を行っていました。このように「四つの窓口」を通して海外との交流が続いたことから、日本は江戸時代には「鎖国」をしていたわけではないとする考えもありません。」

と「鎖国」に対する考え方も紹介しています。



「鎖国」という言葉は、江戸後期に志筑忠雄という学者がドイツ人医師ケンペルの著書を翻訳した際、「鎖国論」という言葉を使ったのが始まりでした。江戸時初期に当時の人が「鎖国」という体制を意識していたのか疑わしいとする主張もあり、「鎖国」と断定を避けているのです。

○「踏み絵」から「絵踏み」に
教科書にも出てくるこの様子を、私は「踏み絵」と習いました。イエス・キリストや聖母マリアの絵を踏ませて、キリスト教の信者を見つける行為のことです。しかし、今では「絵踏み」とされており、教科書には、ことさら言葉の使い分けをきつちり行っています。

・絵を踏ませる行為↓「絵踏」（えぶみ）
・イエス・キリストや聖母マリアの絵が描かれた像↓「踏絵」（ふみえ）
として区別しているのです。教科書にもキリストの像が載っていて、その説明文には「絵踏みに使われた像（踏み絵）」と記述されています。



たしかに、「絵を踏む」のだから「絵踏み」が正しいということなのでしょう。

連載—三六年間の教育を振り返る①—

「三つの波」

私はこのまま教師が終わると、三十六年間教師生活を続けていたことになりました。一九八五年、阪神タイガースが二十一年ぶりの優勝を果たした年に教師になりました。

この三十六年間に、四度の学習指導要領の改訂があり、幾つかの教育改革が行われてきました。私が公立学校の教員であった以上、いろんな疑問を持ちながらも、それを進めてきた側だと言えます。

私が教師になった年は、既に「詰め込み教育」から「ゆとり教育」に向かう途上でした。そして、二〇〇二年から「ゆとり教育」が始まり、

すぐに、それが見直され（脱ゆとり教育）、「ゆとりでも詰め込みでもない教育」が始まり今に至ります。「ゆとりでも詰め込みでもない教育」と文科省は言うのですが、私の感覚では、今こそ「詰め込み」にしか思えないのですが…。

「詰め込みからゆとり」「ゆとり」「ゆとりから詰め込み」へと、この三つの大きな波があった中、私は教師をやってきました。この間、生活科が始まり、学校週五日制、「総合的な学習の時間」が始まりました。パソコンが各校に設置され、コンピューター教育（今はICT）が始まりました。そして、特別な教科、道徳が始まり、英語が教科になりました。コロナ禍で諸外国に比べ、日本のICTの遅れが際立ち、前倒ししてタブレットやPCの学校への導入が早まるうとしています。

この先には、黒板やノートや鉛筆を使わない授業が訪れるのかもしれませんが。

「ゆとり教育」を山として、いろんな事があつたなと思います。その時その時に、何を考えていたのか、その教育改革はどうだったのかを、現場の教師という視点で回想します。この間に、幾つかの文書を書いてきたので、その時考えていたことも紹介しながら、振り返ってみたいと思います。

私が教師になってからの教育の流れ

- 1980 **学習指導要領改訂**
- 1985 小学校採用となったが七条養護学校で体育教師として教師が始まる。
- 1988 養護学校から小学校へ
- 1992 **学習指導要領改訂**
新学力観（個性をいかす教育）
生活科の導入
- 2002 **学習指導要領改訂**
ゆとり教育 「生きる力」
総合的な学習の時間
完全週五日制
- 2003 歯止めの撤回（発展的な学習）
- 2011 **学習指導要領改訂**
脱ゆとり
（ゆとりでも詰め込みでもない）
外国語活動
- 2018 特別の教科道徳
- 2020 **学習指導要領改訂**
「主体的・対話的で深い学び」
教科外国語

※学習指導要領は完全実施の年